

編集後記

WASEDA RILAS JOURNAL No.10 をお届けします。

2012年4月に開設された総合人文科学研究センター（RILAS）は今年で10年の節目を迎え、本誌も順調に号を重ねてきました。近年、投稿数は増加傾向にあり、本号は論文25件、研究ノート・翻訳・翻刻・報告書・書評7件、部門特集5件を掲載しています。高度な専門性に基づく実証的な論考とともに、部門特集においては領域横断的な方法が広く展開されており、深く広い人文科学の知を追求するセンターの使命をよく反映したものであるでしょう。

特集としては、「グローバル化社会における多元文化学への構築」部門が当センター2021年度年次フォーラムとして企画した「東アジア文化交流—古代・中世仏教の相互往来—」（特集2）の報告をはじめ、「トランスナショナル社会と日本文化」（特集1）、「イメージ文化史」（特集3）、「知の蓄積と活用に向けた方法論的研究」（特集4）、「心と身体の関係と可塑性に関する学際的研究」（特集5）の各部門から、寄稿がありました。

私自身が専門とする美術史研究の立場から本号を読むと、その基盤となる作品論・作家論が充実していることを感じます。カラー図版を多く用いることのできる、オンライン・ジャーナル形式の特質が十分に活かされています。また、絵画史料論の方法を用い、造形を通じて時代や地域の歴史像を描き出す論考や、文学や音楽に内包される絵画や映像に着目した論考からは、視覚イメージに関する分析が隣接領域においても根付いていることに気づかされます。このように、個別の論考の集積としてだけでなく、知の越境や同時代性を読み解く窓としても、本誌を通覧していただきたいと願っております。

本号の編集は、河野貴美子前所長、ライアン・スティーブン前副所長、センター所属の助教・助手、文学学術院事務所のスタッフの皆さんが担当しました。寄稿者、査読者、人文研運営委員会委員をはじめ、刊行に尽力いただいた全ての方々に、深く感謝申し上げます。

（早稲田大学総合人文科学研究センター所長 山本聡美）